

小特集「電子メールとグループ通信」

—本格的な実用に向けて—の編集にあたって

山村陽一† 中島健造†† 後藤浩一†††

身のまわりを見渡してみると、最近、確かにコンピュータが増えてきている。実際には、汎用機の端末、パソコン、専用機等々と、さまざまであろうが、エンドユーザにとっては、ディスプレイモニタとキーボードさえあれば、それが「コンピュータ」と思える。そして、これら「コンピュータ」は、どれもみな急速な進歩を遂げてきている。ワープロ専用機でも通信機能が備わったものが登場し、従来の端末専用機は多機能ワークステーションに替わり、また、パソコンを汎用機の端末として使うことも多くなった。また、今やパソコン通信は一つのブームとなっている。

もう一つ、これら「コンピュータ」の進歩の中で忘れることのできないものとして、日本語処理がある。日本語ワープロはもちろん、大型汎用機からパソコンにいたるまで日本語文字が扱えることは常識となった。ワープロのソフトウェアの進歩もめざましく、ワープロ専用機、あるいはパソコン用のワープロの利用者の増大も著しいものがある。最近の全国大会の講演論文集を見ると、ワープロで原稿を作成したものがほとんどになり、手書きの原稿は数えるほどになってきている。

この、ワープロ書きの原稿を寄せた人の中で自分自身でワープロをたたいた人の割合はどれほどなのだろうか。電話をかける際、そのたびに秘書か誰かに依頼するという人は、数少ないだろうが、ワープロとなるとその数はまだまだかなり多いと思われる。人間の日常活動の中で、情報交換の果たす役割はかなり大きなものだろうが、現在その中心は、電話、ファクシミリ、そして紙というところである。しかし、身近に増えたこの「コンピュータ」と「ワープロ」の組み合わせは、電話と同じように誰でも気軽に情報交換に利用できる環境となりつつある。

この電子的な手段による情報交換—具体的には、電子メールやグループ通信—のための環境は、わが国でも整いつつあるが、米国と比べると、まだまだといったところである。米国ではすでに、企業内はもちろん、企業間、大学間、研究者間といろいろなレベルに

ネットワークがはりめぐらされ、その一部は米国国内にとどまらず世界各地にまで拡がっている。そして、このネットワークを用いた通信は、研究活動、企業活動といった日常活動のなかに完全に定着している。

本特集では、電子メールとグループ通信を取り上げ、これを日常の道具として、より一層、普及させることを目的に、この分野の専門家あるいは実際に使いこなしている方々に解説していただいた。通信に関する情報処理技術よりも、実際に使うための解説に力点をおくようお願いした。

本特集は、全体として6編の解説によって構成されている。

まず初めの「総論：電子メールとグループ通信」では、「人と人との通信」という観点から始めて人間にとっての通信を概観し、さらに電子メールの標準化として作業が進められているMHSについても解説を加えている。次の「研究ネットワーク」では、おもに研究者間で広域的に使われているメールネットワークの現状と各ネットワークを紹介した。

次の2編では、実際に電子メールを充分使いこなしている立場から、使用経験をとおしての解説である。「LANとワークステーションを用いた電子メール通信」は、企業内での例、そして「電子メール討論」は、米国を中心とした国際的な研究者間での活用事例となっている。

最後の2編は、今後の電子メール・グループ通信の、普及、発展に向けて、これを社会システム、企業システムという二つの観点から「グループ通信の社会システムへの影響と課題」および、「企業システムへの影響と課題」と題して解説した。

本特集が、電子メール・グループ通信の普及、発達に少しでも寄与できれば幸いである。

この文章はパソコン上の日本語ワープロを使用し、紙に印刷して、情報処理学会に送った。

ここではまだ電子メールを使えない。

(昭和62年7月10日)

† 日本ユニパック(株)

†† NTT 電気通信研究所

††† (財)鉄道総合技術研究所